

この言説においても、「に従って (secundum)」、「から (de)」といった前置詞とともに、神と人間が対比されており、初期著作に由来する理解がそこにあることが分かる。また、ここでは「意志」の概念が言及されており、自らの意志のあり方に「嘘」を見出す『告白』第10巻の議論と一致する理解が示されてもいる。

このようにアウグスティヌスは、神を愛し求めながらもそれに背く意志も同時に抱いてしまう心のあり方に、すべての人間に共通する「罪」を見出している。それは真実を心に抱きながらも虚偽を語る、「二心」をもつ嘘つきのあり方に他ならない。「嘘」を一つの言語行為としてではなく、原罪としてすべての人間がもつ生のあり方とみなす彼の理解は、その最初期の楽園神話解釈に既にその萌芽がありながら、後期に至るまでに深化し、固有の人間観を形成したと言えるだろう。

この彼の人間観、原罪理解は、しばしばそう言われるように「悲観的」なものだろうか。嘘つきは虚偽のみを愛する者ではなく、真理を失いたがらないという仕方で真理をも愛する者だ。「嘘」を人間の生のあり方として位置づけるアウグスティヌスは、罪人である人間の生にこそ、神との根源的なつながりを見出しているのではないか。それは闇の中にこそ光を見出そうとする、希望をもった人間観であると言うべきだろう。

ペラギウス派による原罪論批判の本質と課題

——悪は「善の欠如」であるか?——

山田 望

I. 近年の研究動向とペラギウスの非論駁的文書

本シンポジウム提題では、最近の研究動向をも踏まえながら、ペラギウス派によるアウグスティヌスの原罪論に対する批判の本質とは果たして如何なるものであったのかについて、とりわけ、ペラギウスの弟子であったエクランムのユリアヌスとの性欲を巡る論争を手懸かりとして探りつつ、原罪論批判によって浮かび上がってくるさまざまな課題を浮き彫りにする

ことを目的としている。

ところで提題者は、シンポジウムでの発表を終了するまで、執筆既定の中に、本提題原稿には「6枚程度」との分量制限のあることに気づかず、発表当初、A4原稿17枚、約2万字に上る原稿を用意して提題を行った。発表後にはじめて分量制限について知り、章立てを大幅に割愛の上、出典を明記した注を大幅に削除し、17枚の原稿を6枚に抜粋、縮小した「抄録」として、本提題原稿を投稿することとした。本稿には、当初の提題原稿の内、Ⅲ章の本文のみを、注も大幅に削除して収めており、当日発表した17枚のフルテキストについては、シンポジウム企画委員とも相談の上、その後の新しい知見をも盛り込みながら、あらためて別の学術誌に掲載することとなった。

なお提題者は、2017年9月24日にメルボルンで開催された APECSS (Asia Pacific Early Christian Studies Society) 学会にて、異なるタイトル、論旨ではあるが、本提題の結論部分以外の内容をも包含しつつ、新たな知見を提示する英文発表を行っており、その発表内容は、2018年中に以下の表題で、Brillの学術誌 *Scrinium*, Vol. 14 に、総32頁からなる英文フルテキストで掲載される予定である。N. Yamada, "Rhetorical, Political and Ecclesiastical Perspectives of Augustine's and Julian of Eclanum's Theological Response in the Pelagian Controversy," *Scrinium*, Vol. 14, Brill, 2018, (in print). 以上の経緯により、本稿においては、シンポジウムでの提題発表の内、主にⅢ章で取り上げられた、アウグスティヌス最晩年にユリアヌスとの間で交わされた論争の内容に限定し、ペラギウス論争における、原罪論や性欲観を巡る諸問題の本質的解明を試み、かつ、発表原稿の結論部分を最後に提示することで、「抄録」として提題内容を纏めることとしたい。

長らくペラギウス派の研究は、論争に勝利した正統派アウグスティヌス側からの、あくまでも異端者として見なす研究が主流であった。しかし、この数十年の間に劇的に研究状況が変化し、現在では、ペラギウス派内部にかなりの多様性のあったことが明らかとなり、アウグスティヌスとの論争以前に書かれた非論駁的文書の評価から、これまでとは大きく異なるペラギウス像が浮き彫りとなり、ペラギウス派の主張を肯定的に評価する研究も現れている。その最大の根拠は、西方側では絶大な影響を及ぼし、西洋キリスト教神人学の重要な要となってきたアウグスティヌスによる原罪論が、キリスト教古代の教理確立に重要な役割を果たした東方教会では全

く痕跡を残しておらず、正教会の神人学ではほとんど顧みられてこなかったとの明らかな事実による。今日では、ペラギウス派の神人学を東方神学やギリシャ的修道論との関連で解明しようとする研究が中心となり、かつ、北アフリカの霊性・人間観との対比や、東方での神学派閥をめぐる教会政治的状况の中で見直しを図ろうとする研究も現れるようになった¹⁾。

最近の研究によれば、アンティオキア伝承の流れを汲む神人論を展開させた長老ルフィーヌスと呼ばれる人物がペラギウス派の創始者であり、その特徴的見解の唱道者であったとする見方が有力なものとなりつつある²⁾。

ペラギウス自身については、その非論駁的文書の研究が進んだ結果、体系的理論による論争よりも、ローマ教会内部に生じた新たな状況を前に、絶望する信徒を励まし彼らの生きようとする意欲を何とか途絶えさせないよう司牧的配慮に賢明に勤しむ姿が明らかとなった。ペラギウスを取り巻いていたローマ教会の新たな状況とは、それまで教会の外で罷り通っていた弱者抑圧の不義不正がキリスト教会内部において跋扈し、いと小さき多くの信徒が、権威を振りかざす、驕り高ぶった富める者、力を行行使える者たちによって苦しめられているとの、キリスト教会始まって以来の危機的な状況に他ならなかった。ローマ教会内部の深刻な状況への言及は、ペラギウス派文書において枚挙に暇がないが、たとえば『キリスト者の生活について』においては、教会内部の弱者抑圧の現状が生々しく指摘されており³⁾、その現状批判の文脈におけるペラギウスの言葉、すなわち、「手が清く、あらゆる不義や略奪からも免れており、また、祈りの唇が正しく、あらゆる罪からも免れている人は、神に手をさしのべるに値する」との発

1) ペラギウス派を東方神学との類似性の観点から評価しようとする研究は、最初期のものとして、T. Bohlin, *Die Theologie des Pelagius und ihre Genesis*, Uppsala/Wiesbaden, 1957; G. Greshake, *Gnade als konkrete Freiheit. Eine Untersuchung zur Gnadenlehre des Pelagius*, Mainz, 1972; その後のものとして、山田望『キリストの模範——ペラギウス神学における神の義とパイデア』教文館, 1997年; M. Lamberigts, “Competing Christologies: Julian and Augustine on Jesus Christ,” *Augustinian Studies*, 36: 1, 2005, pp. 159-194; A. Dupont, “Die Christusfigur des Pelagius. Rekonstruktion der Christologie im Kommentar von Pelagius zum Römerbrief des Paulus,” *Augustiniana*, 56: 3-4, 2006, pp. 321-372; W. Dunphy, “The Pelagians and their Eastern (Antiochene) Sources: Theodore of Mopsuestia on Lk 2.52 in the Liber de Fide by Pseudo-Rufinus?” *Revue d'études augustiniennes et patristiques*, 58: 1, 2012, pp. 97-111.

2) W. Dunphy, “Marius Mercator on Rufinus the Syrian, Was Schwartz Mistaken?” *Augustinianum*, 32: 2, 1992, pp. 279-288; Id., “Rufinus the Syrian: Myth and Reality,” *Augustiniana*, 59: 1-2, 2009, pp. 79-157.

3) Pelagius, *Liber de vita christiana*, 11 = PL 40, 1041.

言が、前後の弱者抑圧を指摘した文脈から全く切り離されて、原罪を否定し完全さを要求する傲慢な功績主義の言葉としてディオスポリス司教会議において告発された⁴⁾。ペラギウスは、そのような言葉を語ってはいないと弁明し、この会議では無罪となったが、アウグスティヌスが、ペラギウスは虚偽の発言によって言い逃れをしていると告発したために、最終的にペラギウスは、原罪を否定する異端者として排斥される結果となった⁵⁾。ディオスポリス司教会議で引き合いに出された発言は、完全さを要求する傲慢な功績主義の発言などでは全くなく、ましてや原罪を否定する意図で語られた神学的主張でもなかった⁶⁾。教会内部の弱者抑圧を指摘しようとした本来の真意から全くかけ離れた扱いを受ければ、そのような言葉を語ってはいないとペラギウスが否定したのも当然のことであった。アウグスティヌスには、ペラギウスの真意が全く理解できなかった、あるいは文脈を無視して抜粋されたその一文をもって、ペラギウスを誤解したとしか言いようがない⁷⁾。

ペラギウス派の言動を規定していた当時のローマ教会内部の状況は、迫害を生き抜いてきた自発的信仰者集団としての初代教会ではもはやなく、それまで教会の外にあったはずの弱者抑圧の構図を抱え込み、構造悪としてのさまざまな差別にキリスト者自身が支配されるようになった多数派教会の現状に他ならなかった。教会内部に新たに生じた危機的・否定的状況に対する批判としてのペラギウスの発言の真意を汲み取ろうとせずに、ペラギウス派を、恩恵を無に帰する傲慢な功績主義者、原罪の悲惨さを否定する楽観主義者と決めつけるのは、初めて本格的なペラギウス派文書の史料的研究を公にしたT・ボーリンの言葉に従えば、カリカチュアのレベルに留まる偏見に満ちた見解であったと言えよう⁸⁾。

4) Ibid., 11 = PL 40, 1042.

5) この経緯については、R. E. Evans, "Pelagius' Veracity at the Synod of Diospolis," *Studies in Medieval Culture*, Kalamazoo, 1964, pp. 21-30.

6) デイオスポリス司教会議議事録の復元と問題点については、W. Dunphy, "Concerning the Synod of Diospolis and its Acts," *ACADEMIA Humanities, Social Sciences*, 63, 1996, pp. 101-117.

7) ペラギウスの発言の真意については、N. Yamada, "Pelagius' Narrative Techniques, their Rhetorical Influences and Negative Responses from Opponents Concerning the Acts of the Synod of Diospolis," *Studia Patristica* 98, 2017, pp. 451-462.

8) T. Bohlin, op. cit., p. 40.

Ⅱ. ユリアヌスによるアウグスティヌス批判

エクランムの司教であった45歳のユリアヌスと、齢75歳を過ぎてもなお巧みな修辭的弁舌を駆使するアウグスティヌスとの、原罪と自由意志、性欲や結婚を巡る論争は、ペラギウス論争のクライマックスとも称すべき最も長大な論争の舞台となり、双方が修辭的技巧に長けていたこと、お互いに揚げ足を取り合うような局面も度々重なったこともあり、複雑煩瑣な論旨をきわめて冗長に論じ合った結果、『ユリアヌス駁論——未完の書』は1000頁を超えても未完のまま終わることとなった⁹⁾。

A. アウグスティヌスの原罪論と性欲観

アウグスティヌスは、創世記3章16節「あなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。」との聖句から、性欲、生殖に伴う快樂、さらに出産の際の陣痛をまさに原罪の現れであると理解する。生殖や出産に伴うこれらの快樂や痛みを、アウグスティヌスは、自然そのものが墮落し病める状態にあることの証であると見なしたのである。

アウグスティヌスにとって人間の自然本性は、アダムの墮罪以降、壊滅し欠損を被ったために、それが神から注がれる特別な恩恵によって癒され回復されない限り、いわば肉欲の病に捕らわれ、自由意思に損傷を被った病める自然本性に他ならない。しかしながら、キリスト教徒のみがキリストの恩恵によって「解放された意志 (*liberum arbitrium liberatum*)」を持つことができ、肉欲の奴隷としての桎梏から解き放たれる。しかし、それでもなおキリスト教徒になった後も性欲は残る。この矛盾を、アウグスティヌスは、使徒パウロの「義人にして罪人」という標語の下に解消しようとする。

洗礼を受け原罪から浄められたはずのキリスト者にも性欲は残る。ここからアウグスティヌスのいわば「きわどい」性欲解釈が展開される。キリスト者の場合に、性欲は「もはや罪ではないが、しかしそのように呼ばれる (*iam non sit peccatum, sed hoc vocetur*)。』キリスト者の夫婦においても、生殖のために性欲は不可欠である。しかし、キリスト者の夫婦の場合、

9) Augustinus, *Opus Imperfectum Contra Iulianum*, Tomus Prior, Libri I-III = CSEL, 85/1, ed. Michaela Zelzer, Vindobonae, 1974; Id, Tomus Posterior, Libri IV-VI = CSEL, 85/2, ed. Michaela Zelzer, Wien, 2004.

神への愛を次第に深めていくことによって、性欲は「罪としては不問に付される (ut peccatum non imputetur)。」キリスト者の夫婦にも、いまだ「ある種の悪質な情緒 (affectio quaedam malae qualitatis)」として性欲があるが、それは、「行為においては残るものの、罪責としては消失してしまう (manet actu, praetereat reatu)。」つまり、キリスト者の夫婦にとって性欲はもはや罪責を伴わず、しかも彼らはこの受け継いだ悪を、子孫を儲けるという目的のために善用しているという。アウグスティヌスは、首尾一貫して、アダム の 墮 罪 による人間本性の壊廃・欠損の結果、人間は悪としての性欲を罰として有することになったと繰り返し主張する。アウグスティヌスは、この性欲という悪は、それが子孫を儲けるという目的のために善用されない限り悪であるという。したがって、アウグスティヌスは、キリストの人性は我々人間や聖人に性欲が備わっているのとは異なり、マリアが聖霊によって身ごもることにより生まれたキリストには、霊に抗って作用する性欲は一切存在しなかったと主張する。

B. ユリアヌスによる原罪論批判

創世記 3 章 16 節のイヴに対する神の言葉、「あなたの産みの苦しみを大いに増す」を、アウグスティヌスは原罪の起源と見なしたが、ユリアヌスはこれを、まさに文字通りの意味に他ならないと解釈する。すなわち、陣痛は他の動物同様に人類の女性が出産の際に当然経験する子宮収縮に付随する自然現象である。しかし、神との約束を破ったイヴ自身の陣痛は、罰としてより大きなものになったと理解する。ユリアヌスによれば、イヴの経験する陣痛が彼女の罪の結果として大きなものとされたのであって、イヴの犯した罪により、人類の女性が罰としての陣痛を経験するようになったのではないと理解する。

ユリアヌスは、人間の自然状態を罪であり人祖の犯した罪への罰と見なしたところにアウグスティヌスの誤りがあるとし、「自然の罪は存在しない」と断言する。ユリアヌスによれば、性欲は決して罪の結果や罪責に対する罰などではなく、それらはアダムとイヴが楽園で創造された当初からの自然に属するものであった。むしろ性欲に纏わる罪は、性欲が本人の意志の働きにより過剰な刺激をもって必要以上に駆り立てられ、そこに本人自身の意志によって人を傷つける行為がなされる場合である。ユリアヌスは、自然の所与としての性欲と意志に基づく行動とを明確に区別していた。ユリアヌスにとって、アダムとイヴが楽園で経験した死とは、肉体的死で

はなく、神との霊的繋がりが失われるという霊的死に他ならなかった。ユリアヌスは、「自然は罪とは関わりがなく」、「性欲は決して悪などではあり得ず」、「単なる一人の人（アダム）の功績が、万物の有り様を変えてしまうことはあり得ない」との反論を繰り返したのである。

ユリアヌスの理解では、アウグスティヌスの言う原罪は存在せず、あくまでも自由意志によって犯される罪こそが罪と呼ばれるに値する。従って、キリストは性欲を持たなかったとのアウグスティヌスの主張にユリアヌスは真っ向から反対し、アダムもキリストも、我々と全く変わらない性欲を持っていたこと、そうでなければ、キリストは、性欲を駆り立てて罪へと誘惑する悪魔的な力に抗い、それを退ける意志の究極の模範とはなり得なかったのではないかと反論する。幼児洗礼の意味を原罪を取り除くためではなく、キリスト者共同体に加えられるための聖化と捉える点で、ユリアヌスとアンティオキア伝承との共通性が指摘されてきたが、キリストの人性を強調する点でも、ユリアヌスのキリスト論はアンティオキア伝承のそれに酷似していると言える。

一方、アウグスティヌスは、キリストに悪が存在したはずがないとの理解から、キリストは性欲を持たず、性欲とも淫らな想念とも一切無縁であったと繰り返す。ユリアヌスは、アウグスティヌスのこのキリスト理解は、アポリナリウス派のドケティズム同様、キリストの人性が感覚を有さず、苦痛も苦難も感じなかったというに等しいと批判する。キリストが性欲を持たなかったならば、キリストは罪を避けるよう勧告することもできず、我に従えとの導きによりキリストの模範に従って愛の掟の内に生きようと促されることも無意味になってしまうとユリアヌスは反論する。ユリアヌスは、キリストは、我々と全く同様に生殖器を有し、性欲も有していたが、それら自然の所与を、過剰な刺激によって暴走することがないように完璧に統御することで真の人たり得たということを強調する。これに対しアウグスティヌスは、キリストにも生殖器はあったが性欲はなかったこと、それが霊に反して淫らな思いで性欲により勃起することはなかったと主張し、ついにはユリアヌスを「性欲の愛好者」、「汝の恥すべき部分を覆い隠すがよい」などと罵倒するに至る。ユリアヌスも応戦し、キリストは生殖器を有しながらも性欲はなかったと主張するのなら、キリストは夢精を経験しなかったのか、もしくはキリストを宦官にしておこうというのか、と反論する。お互いに全く歩み寄る余地のないまま、性欲や自然本性を巡る論争において、アウグスティヌスとユリアヌスは最後まで平行線を辿るのみ

であった。

Ⅲ. 結論に代えて——アウグスティヌスによる原罪論の課題

最後に、ペラギウス派の神人学と彼らによる原罪論批判の主張や、原罪論の教理確立の経緯から、次のような課題を指摘したい。

A. アウグスティヌスが、その独自の原罪論により人間本性の罪深さを浮き彫りにしたことは独自の功績であったことは認められるが、アウグスティヌスが、性欲をも人祖アダムが犯した罪の結果でありその罪責への罰であったと見なし、それを統御できず善用もなされなければ性欲は悪であると捉えたこと、換言すれば「善の欠如」としての悪理解を性欲にも適用させたことには大いに無理があったと言わざるを得ない。

B. 善すなわち癒しの恩恵が欠如した自然本性は、それ自体では無力であるとのアウグスティヌスの本性理解は、癒しの恵みを制度的に媒介する多数派型教会の存在を不可欠のものとしたが、その点で異教排斥と幼児洗礼の義務化を迫られていたローマ教会の利害にまさに叶うものであった。他方、自然本性の恵みに加えてキリストの模範が与えられ、模倣論の動的参与関係による自発的決断の内に神の恵みが働いているとのペラギウス派の主張は、初代教会以来の自発的信仰者集団としての教会像に繋がるものであった。

C. アウグスティヌスが、新プラトン主義の悪理解の思考に影響を受けつつ独自の原罪論を展開させたのに対し、ペラギウス派は、ストア的模倣論に基づいて悪魔の誘惑とアダムが犯した罪による、悪魔的力に起因する構造悪としての社会的不正義を問題にした。思考パラダイムの相違のみならずキリスト論解釈においても、アウグスティヌスとペラギウス派との論争は、アレキサンドリア伝承とアンティオキア伝承との対立衝突に他ならなかった。

D. アレキサンドリアとコンスタンティノーブルの間には、キリスト論を巡るキュリロスとネストリウスの対立が存在した。キュリロスはネストリウス派排斥のためにローマ側の協力を取り付けようとし、他方、ローマ側は、アフリカ司教団からの圧力や異端諸派による西方教会の分裂を避けな

ければならないとの切迫した状況に見舞われていた。原罪論の教理化とペラギウス派の排斥には、東西の教会間、さらにアフリカ管区とローマ管区との思考・風土の違い、両者を跨ぐ教会政治的駆け引きという諸要因が絡んでいた。

E. アウグスティヌスは、西方教会最大の神学者であったのみならず、当代きっての修辞学者であった。「異端」との論争において、アウグスティヌスが修辞学の論法を駆使して自らを正当化すると同時に、論敵の「異端性」を修辞的技法により強調しようとしていた点がさらに解明される必要がある。すなわち、アウグスティヌスのより真実な姿を解明するためにも、その「非神話化」のための研究が一層求められており、それはアウグスティヌスの権威による束縛から比較的自由な、日本の研究者によってこそなされるべきである。

以 上